

# 千葉県成田市奈土貝塚出土の縄文時代後・晩期の土器について

隈元道厚・関根有一朗

## 1. はじめに

本稿は、早稲田大学會津八一記念博物館所蔵の奈土貝塚出土土器の再検討である。

奈土貝塚は、千葉県成田市奈土（旧香取郡大栄町奈土）に位置し、西村正衛教授指導の下、早稲田大学高等学院歴史研究部が1957（昭和32）年に発掘調査を行った。西村正衛教授は縄文土器型式研究を進めるべく利根川下流域に位置する貝塚遺跡の発掘調査を数々行っていた。奈土貝塚の調査はその一環として行われ、わずかな調査面積ながら中期後半～晩期前半の土器、土偶や骨角器、石器など膨大な量の遺物が出土した、旧大栄町最大規模の縄文時代晩期の遺跡である。

本貝塚出土資料で中心となるのは後期後葉～晩期前半にあたる安行式土器である。遺跡数が減少しているとされている縄文時代晩期の貴重な資料群である。特に、利根川下流域は南東北・北関東との関係性もあり、安行式のなかでも一部地域性を見て取れるのである。したがって、奈土貝塚出土の資料は東関東における安行式研究への一助と成りうると筆者は考える。そのため、本稿では特に安行式の土器に集中して記述、考察を行っていく。なお、本稿中ではその一部資料のデータを提示し、最後に型式学的位置づけを行っていく。

また、本報告では図化にあたり、CREAFORM社製3Dスキャナー「Exascan」を用いて土器を三次元計測し得たデータを3DSystem社製編集ソフト「Geomagic Control」を用いてマージ（結合）させ、編集を行った。3Dスキャナーを用いて図化することにより、従来と比べより客観的に、そして精密なデータを取得することが出来るのではないかと。近年、考古資料への応用も増加しており、今後そのさらなる活用が期待される。本稿ではそれらの成果を鑑み、研究・報告での汎用性はいかなる物なのかということにもわずかではあるが、言及していきたい。

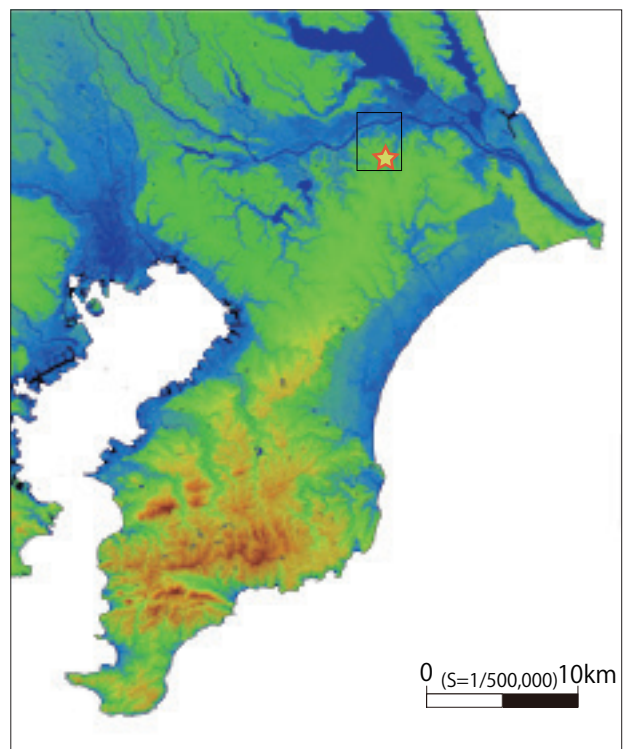


図1 奈土貝塚位置図

（隈元）

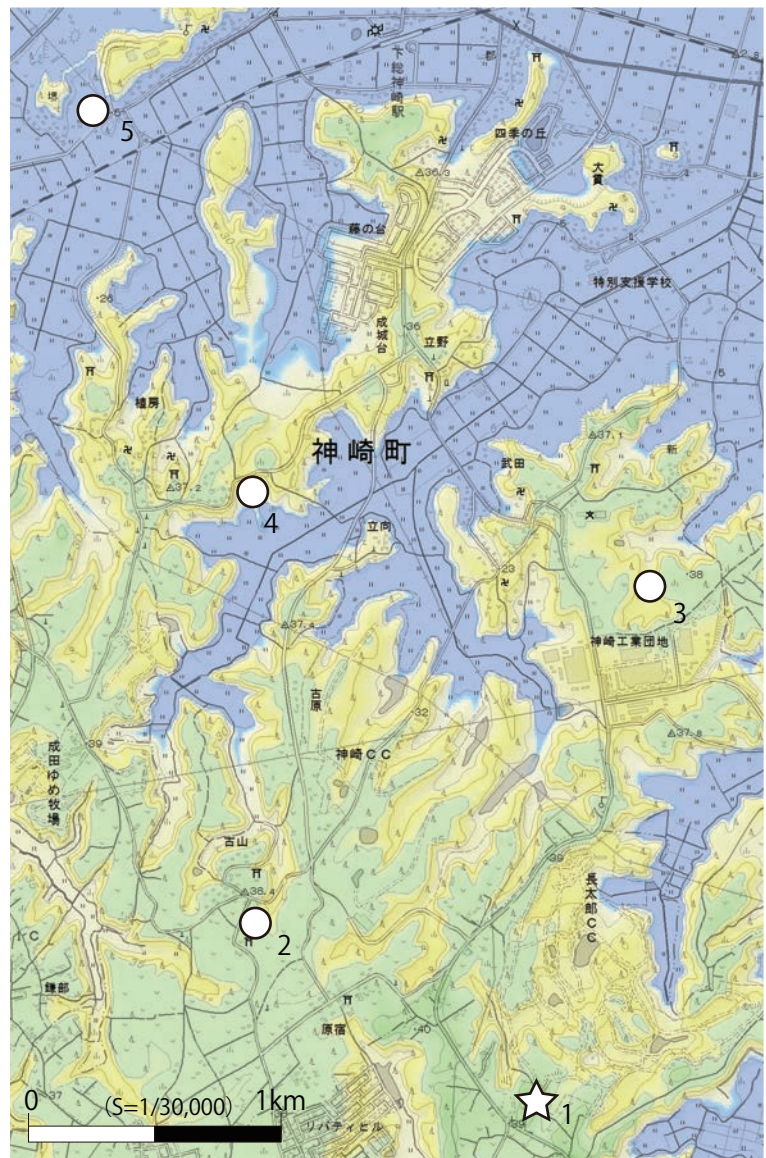
## 2. 奈土貝塚の位置と調査の歴史

奈土貝塚は、千葉県成田市奈土（旧香取郡大栄町奈土）に位置する地点貝塚である。本貝塚は、利根川と大須賀

川に流れ込む小河川により開析を受けた、樹枝状の複雑な地形が広がる洪積台地上に立地している。この台地は標高約40mを測り、鞍部から台地中位面にかけての北西傾斜面に形成された本貝塚は、高位面に位置する A 貝塚と中位面に位置する B 貝塚に分かれている（石橋 1995）。当該地域は縄文時代、縄文海進により海水が河川の上流や支谷の奥まで入り込み、古大須賀湾が形成されていたと考えられており（石橋・黒沢 1998）、そのため奈土貝塚を含め周辺には貝塚が多く確認されている。主な貝塚として、縄文時代早期の西之城貝塚や鶴崎貝塚、前期の植房貝塚、後期の武田新貝塚や古原貝塚の存在が挙げられるが（図2）、これらの遺跡は全て早稲田大学の西村正衛教授による、利根川下流域における縄文文化研究の一環として調査が行われた遺跡である。

本貝塚はまず、1957（昭和32）年に早稲田大学高等学院歴史研究部により発掘調査が行われた（早稲田大学高等学院歴史研究部 1958）。この調査では、縄文時代中期後葉の加曾利 E 式から晩期初頭の安行 3a 式までの土器の他、ミミズク土偶などの土製品、石器・貝器・骨角器、ヤマトシジミを主体とする多数の貝類・魚類・鳥類などの自然遺物が出土した。出土土器の大半を占める土器は、後期末葉の安行 2 式から晩期初頭の安行 3a 式であり、以後本貝塚は後・晩期の貝塚として認識されるようになる。また報告書中に図面記載は無いが、後述する大栄町教育委員会による報告書中の記述から、製塩土器の存在も確認されていたことが分かる（註1）（石橋・黒沢 1998, pp17-18）。

1984（昭和59）年には、大栄町教育委員会により貝塚が存在する台地上の遺跡分布調査が行われ、中期から晩期にわたる縄文土器片や石器類が多量に散布している状況が確認された事から、町内でも有数の縄文遺跡として認識される事となる（大栄町教育委員会 1985）。こうした状況に加え本貝塚が町内唯一の貝塚遺跡でもある事から、1990（平成2）年には町指定史跡に登録されている。1996（平成8）年には、大栄町教育委員会から委託を受けた香取郡市文化財センターにより、史跡保護のための確認調査が実施された（石橋・黒沢 1998）。この調査では、近年の人為的な攪乱が随所で見られたものの、貝層中および貝層下から安行 2 式から安行 3a 式にかけての遺物が多数出土した。これらの調査成果を踏まえ報告書では、本貝塚が安行 2 式期から安



1	奈土貝塚	2	古原貝塚	3	武田新貝塚
4	植房貝塚	5	西之城貝塚		

図2 奈土貝塚の位置とその周辺遺跡

行3a式期に形成されたヤマトシジミ主体の貝塚であり、貝塚は住居跡内に廃棄された地点貝塚であると結論づけられている。また狭い調査範囲の中で多数の製塩土器が出土した事実から、製塩集団との強い繋がりも想定されている。

2000(平成12)年に出版された『千葉県の歴史 資料編 考古1(旧石器・縄文時代)』中でも本貝塚は紹介されている。その文中では、1977(昭和52)年に芝山はにわ博物館による貝塚以外の発掘調査が行われ、早期の遺物包含層や中期後半から後期前半の集落が検出されているがその詳細は不明である、との記述が確認出来る(石橋2000)。(関根)

### 3. 奈土貝塚出土の安行式土器

#### (1) 概要

安行式土器は、古くから精製土器と粗製土器の二重構造を有する土器群である事が知られている。精製土器が複数の器種で構成され、文様などが広範囲で共有される土器群であるのに対し、粗製土器は深鉢のみで構成され、狭い範囲で文様などの各特徴を共有する地域性を持つ土器群である。該期の粗製土器は一般的に“紐線文系土器”と呼称され、文様や施文順序の変遷を基にした編年研究(鈴木1969、金子1972)や、口縁部製作技法を基にした編年研究及び地域性の解明を行なう研究(矢野1993、古谷2004)などが行われている。

後期安行式(安行1式、2式)においては、前段階の曾谷式の系統の元発展し口縁部の装飾に隆体による帯縄文に統一されて行き、安行2式では関東全域においてそれが見られる。近年では、大塚による曾谷式の再定義の考察(大塚2001)や菅谷による精製深鉢に注目した加曾利B式・曾谷式・安行1式に関する考察が行われている(菅谷2004)。晩期前葉の安行3a式は、三叉文・入組文・帯縄文を主体とする。特に頸部文様帯の三叉文や入組文の分析から大洞式との対比、関東の独自性や地域性に関する研究が行われてきた<sup>(註2)</sup>。東関東では安行3b式以降地域性を見出すことが出来る。

本稿で紹介する資料は粗製土器13点、精製土器15点の28点である。その内、**図3-4,5(写真1-4,5)**、**図4-5,6,7(写真2-5,6,7)**はそれぞれ同一個体である。

早稲田大学會津八一博物館の所蔵する奈土貝塚出土資料は、前章でも述べた早稲田大学高等学院歴史研究部による調査により出土した資料である。これらの内、完形品3点は『日本原始美術1 縄文式土器』中でも紹介されており、学術的に価値の高い資料であると言えよう(山内ほか編1964)。こうした状況を鑑み、現在の考古学的見知から再度本貝塚の後・晩期土器資料の検討を行う事は、有意義であると言えよう。したがって、安行式土器を取り上げ、奈土貝塚出土の資料の型式学的な再考を行って行く。すべての資料を図や写真として掲載することは出来ないが、完形資料やその他時期判別の可能な物や残存率の高い資料については図や写真で示していく。

(隈元・関根)

#### (2) 観察所見

##### 粗製土器(図3、図4、図7 写真1、2)

**図3-1(写真1-1)**は、強く内湾する器形と肥厚口縁を持ち、口縁部及び直行する縦位の紐線の貼り付けが行われる。紐線上には指頭押圧が施され、地文として条線が斜状に施文される。**図4-2(写真2-2)**は、口縁部と頸部に紐線を貼り付け、口縁部紐線は下部を削り込んでいる。紐線上には工具により連続押圧を加え、口縁部は横位、胴部上半部には縦位の条線が施文される。

**図3-2(写真1-2)**は、頸部から口縁部にかけて内湾する器形を持ち、口縁部と頸部に紐線文が巡る。紐線文は、

貼り付けがなされず施文工具による連続刺突により表現が行われ、さらに沈線によって区画される。口縁部には横位の斜状沈線、胴部上半部には横位と縦位の条線が施文され、切り合い関係から横位条線→沈線区画→縦位条線の順で施文されたことが分かる。図3-3（写真1-3）は、頸部から口縁部にかけて緩やかに内湾する器形を持ち、口縁部と頸部に紐線文が貼り付けられる。紐線上には工具による連続刺突が行われ、口縁部には斜状の平行沈線文と横位の条線が施文される。文様の施文順序は、横位条線→平行線→紐線貼り付けの順である。図4-1（写真2-1）は、口縁部は内側に肥厚しており、口縁部及び斜めに紐線が貼り付けられる。紐線上には指頭押圧がなされ、紐線文に沿う形で沈線が描かれる。図4-4（写真2-4）は、紐線文が施されず横位条線の上から斜状の平行沈線文が描かれる。

図3-4,5（写真1-4,5）は、頸部から直線的に内湾する器形と肥厚口縁を持ち、口縁部と頸部に紐線文が施される。肥厚口縁の下端部に指頭押圧が施され、口縁部には斜状の条線が施文される。頸部の紐線がはがれた部位からは条線が確認出来る。図4-3（写真2-3）は、口縁部と頸部に紐線を貼り付け、工具による刺突を加える。口縁部には縦位の平行沈線文が描かれ、内部が磨り消される。口縁部には横位、胴上半部には斜状の条線が地文として施され、条線→平行線→紐線貼り付けの施文順序が確認出来る。図4-5,7（写真2-5～7）は、紐線の貼り付けがなされず、口縁部に棒状工具による連続刺突が施される。地文として横位の条線が、口縁部直下の横位沈線から縦位の平行沈線文が施文される。

図7は、前述の『日本原始美術』において安行2式として紹介された資料である（山内 ほか編 1964, pp206）。胴部下半部は石膏による復元が行われているが、口縁部から胴上半部にかけての残存状態は良好で、文様の施文順序がわかる貴重な資料となっている。口縁部と頸部に2条の紐線が巡り、沈線に囲まれた紐線上には工具による連続刺突が見られる。口縁部には、内向きに閉じる弧線文が2組、外に開く弧線文が4組描かれる。弧線文内部には縄文が充填され、弧線文により閉じられた区画内部は丁寧に磨り消される。地文である条線は、口縁部と胴上半部に斜状、胴下半部に斜状ないし横位に施文される。また口縁部の施文は、条線→沈線区画文→弧線文という順序で行われており、鈴木公雄の研究における「安行Ⅱ式A型」に該当すると思われる（鈴木 1969）。口縁部の製作においては、「口縁部の紐線貼付の際、口唇を厚く作り出し、その上に紐線を貼付して厚い口唇部と一体化させる」（矢野 1993, pp85）中妻技法によって製作されている。（関根）

#### 精製土器（図5、6、8、9 写真3、4）

図5-1は波状口縁を呈する深鉢と考えられる物の頂部にあたる破片である。頂部下部には二つの突起が縦に並んで貼り付けられており、上部はブタ鼻状で下部は台形状である。上部の貼り付けの両側面からは粘土紐が外面から内面に回るように貼り付けられている。

図5-2,4は帯縄文系の土器である。両資料とも平縁の鉢形を呈し、図5-2には口縁部にはつまみ出すような形で突起が付されている。図5-4は口縁部に楕円状の粘土が貼り付けられている。胴部の帯縄文上には豚鼻状の瘤が付されており、帯縄文は沈線により上下が区画されておりその他は丁寧なナデが施されている。

図5-2,6は平縁の深鉢で、図5-6は口縁部に瘤が貼り付けられる。口縁部下に帯縄文により楕円形に区画され、文様区画帯下部より弧線上の沈線が施文される。頸部文様帯は入組文が横位に展開すると考えられ、入組の間には縄文が残るがその他の部分はナデにより調整されている。図5-2は帯縄文系で、口唇部の下には指ナデによる調整が施される。口縁部文様帯は入組三叉文が施文されており、三叉文の間には文様は施文されない。

図5-7は平縁を呈する深鉢である。沈線を弧状に横位で展開すると考えられ、その他は磨消縄文が施文されており、ブタ鼻状の貼り付けを有さないシンプルな装飾となっている。無文部はナデにより調整される。

図5-8、図6-1は鉢形土器である。図6-8は平縁の丸底で、胴部より真っ直ぐ立ち上がりやや外反する。口縁部直下には沈線による入組三叉文が施文されている。その下部は削りによりボジによる入組三叉文が施されておりまた、削りの部分はナデによる調整が行われている。胴部は水平に台形状の突起が張りつけられている。底部上半は2条一対の弧線状の沈線がめぐり、沈線の間をのぞき丁寧なナデが施されており、沈線の間には磨消縄文が残されている。図6-1は緩やかな波状の口縁部を呈し、巻貝を模したような突起を有する。口縁部文様は口縁部のカーブに沿って施文されており、カーブの下部に魚眼状三叉文が、そして三叉文の横には腕のように施文されたナナメ状の沈線の中に独立の三叉文が施文されている。口縁部文様帯下部にはこれに沿うように扁平な突起が貼り付けられており、胴部下部には弧状の沈線が連続して一周するように施文され、内部の縄文は丁寧に磨消されている。

図6-2は5単位の波状口縁を呈すると考えられる深鉢で、頂部には瘤が貼り付けられる。口縁部直下はその湾曲に沿って帯縄文が施され、三角形区画をなしている。頸部から胴部にかけては帯縄文により2分される。上部は間を楕円状に沈線が施文され楕円の間は地紋の縄文が残り、各楕円の間は帯縄文上に豚鼻が貼り付けられる。文様帯下部は弧状の沈線が横位で施文され、弧線の間には豚鼻が縦に2個付される。胴部下半は地文のみと考えられ、無文部は丁寧なナデが施される。

図6-3は楕円形の口縁部を呈すると考えられる鉢の底部である。立ち上がりから口縁部までは約2cmと短い。底部は入組三叉文が縦に連続して施文されており、無文部は丁寧なナデが施されている。図6-4は深鉢でおそらくゆるやかな波状を呈する。口縁部の頂点には楕円形の瘤がつけられ、その両脇から入組三叉文と考えられる二又の沈線が施文されている。

図8-1は平縁を呈する浅鉢である。胴部は帯縄文と刻目文による区画の中に「の」字状の入組文の両脇に三叉文を伴うものが横位に展開していく。胴部下半部は磨消縄文が施文される。口縁部には2つの突起が付される。この突起の直下のみ他の文様と異なり三角形区画の中にV字状の沈線と丸状の沈線に三角形の挟みを入れた文様が施されている。

図8-2は平縁の口縁に二又の突起に5条の刻みを入れたものが3個付されている。胴部は帯縄文により区画され、上下から三角形の挟みが加えられる。その挟みの間に楕円形区画を施しその中に「の」字状に入組む三叉文を充填するものが横位に展開する。胴部下半は磨消縄文が施文される。

図9は平縁の深鉢である。砲弾型の底部から立ち上がり頸部が最大径となり、口縁部に向かって内傾していく。底面は地文の縄文のみである。文様帯が細い帯縄文によって区画され、文様帯内は「S」字状に貼り付けた帯縄文を線対称に配置し、下部に丸状の帯縄文を充填する。その横にはりボン状に貼り付けた帯縄文を充填しており、各帯縄文が口縁部下部の丸状の帯縄文を起点としている。この2つの装飾を1組とし横位に展開する。(隈元)

#### 4. 奈土貝塚出土の安行式土器の型式学的位置づけ

今回紹介した粗製土器を口縁部製作技法によって分類すると、図3-1、図4-2(写真1-1、2-2)は安行2式前半に、図3-2,3、図4-1,4(写真1-2,3、写真2-1,4)は安行2式後半に、図3-4,5、図4-3,5~7(写真1-4,5、写真2-3,5~7)は安行3a式に比定される。また、その多くが安行2式後半から安行3a式の広畑技法に区分される(図3-3、図4-3,4)。古谷渉の分析によると、この技法は霞ヶ浦周辺を中心に分布する製作技法である事が判明しており、本貝塚の立地の点から見ても先行研究と合致する結果となった(古谷 2004)。一方で、印旛沼南岸~東京湾東岸に分布の中心を持つ内野技法ないしその直前段階とみられる土器も一定数確認されている(図3-1,4、図4-2)。この状況から、本貝塚の人々が印旛沼方面との交流を持っていたことが推察できる。本貝塚出土の粗製土器を全て分析できたわけではないが、こうした地域間の交流の様相は現在の安行式粗製土器研究の成果に基づき検

討を行った結果判明した事象であり、本稿における一つの成果であると言える。

精製土器は図5-1～5,7 (写真3-1～5,7) は安行2式に、図5-6,8と図6-1～4は安行3a式に比定され、図8-1,2は安行3a式新段階もしくは3b式に比定されよう。特に図8の2点は三叉文から伸びる沈線が「の」字状に入れ組む前浦式に見られるような特徴があるため、他の土器と比べて新しい段階の土器といえる。そのため、前浦式や姥山式に見られる東関東地域の独自性や地域性の萌芽段階にあたるのではないか。本遺跡の主体となるのは後期末～晩期前葉ではあるが、一部新しい段階の土器を確認することができた。したがって、さらなる分析や本地域の周辺遺跡との比較を行うことで縄文時代晩期の土器や社会構造への考察を深めることが出来るのではないか。

(隈元・関根)

## おわりに

以上、ここまで千葉県奈土貝塚出土の土器を概観してきた。前述の通り、本稿では後・晩期の土器に限り報告した。粗製土器では広畑技法に分類される土器群が多く、先行研究を追認する結果となった。精製土器においても、関東独自の文様構成から、先行研究を追認する形となる。しかし、図8-1のように安行3a式新段階と考えられる土器もあり、安行3b式以降に東関東において見られる縄文時代晩期の地域性の在り方を伺うことができるのではないか。また、本稿では試験的に3Dスキャナーにより計測、作図をおこなった。その結果、特にミガキ・ナデ・ケズリ各調整の単位や細かい調整、施文順序などを明瞭に観察することができた。本文では各資料の事実記載に留まったが、今後の研究において有効活用できよう。安行式においては、施文方法以外の調整や製作技法に関する研究はそれほど多くないためこのような分析方法は有効であると考えられる。もちろん最も重要なことは自ら資料を手に取り実見することである。ただ、3Dスキャナーなどを用いることでさらに縄文研究の幅が広がることもあるであろう。

本稿では、本貝塚出土の資料を全て確認出来た訳では無く、各技法の比率や文様、器形の系統や分類を定量的に示すことは出来ていない。そのため、本貝塚における土器製作や人間活動の全容の実態解明は今後の研究に期待したい。

(隈元・関根)

## 謝辞

本稿の執筆に辿り、指導教員である早稲田大学文学学術院高橋龍三郎教授には平素より厚いご指導をいただき、本稿はその成果の一部である。

早稲田大学會津八一記念博物館助手の石井友菜氏には多大なるご教授、ご協力を賜った。また、早稲田大学考古学コースの高橋巨氏には写真撮影の際にアドバイス並びにご協力を得た。ここに厚くお礼申し上げたい。

表1 掲載土器観察表(1)

図版	写真	口縁部 形態	外面所見	内面調整	色調	出土層位	備考
図3-1	写真1-1	平縁、 肥厚	口縁部及び直交する縦位の紐線文、紐線上は指頭押圧、斜状条線	横ナデ	黄褐色	6区貝層中	内野技法 直前段階
図3-2	写真1-2	平縁、 肥厚	口縁部と頸部に紐線文、紐線上は工具による連続刺突、紐線は沈線により区画、口縁部：横位条線 胴部：縦位条線	横ナデ	外面：黒褐色 内面：明褐色	4区貝層下	石神技法？
図3-3	写真1-3	平縁、 肥厚	口縁部と頸部に紐線文、紐線は工具による連続刺突、斜状の平行線文、口縁部条線：横位 胴部条線：縦位	横ナデ	外面：黒褐色 内面：明黄褐色	6区混貝層	広畑技法
図3-4.5	写真1-4.5	平縁、 肥厚	肥厚口縁の下部に紐線文、紐線は指頭押圧、条線は斜状	横ナデ	外面：褐色 内面：黄褐色	不明	内野技法
図4-1	写真2-1	平縁、 肥厚	口縁部及び斜めの紐線文、口縁部は内側に肥厚、紐線文に沿う沈線、紐線は指頭押圧	横ナデ	外面：黒色 内面：黒褐色	4区貝層	石神技法？
図4-2	写真2-2	平縁、 肥厚	口縁部と頸部に紐線文、口縁部紐線下を削る、紐線文は工具による連続押圧、口縁部：横位条線 胴部：縦位条線	横ナデ	外面：黒褐色 内面：暗褐色	不明	内野技法 直前段階
図4-3	写真2-3	平縁、 肥厚	口縁部と胴部に紐線文、紐線は工具による連続刺突、平行線文内部が磨消、口縁部：横位条線 胴部：斜状条線	横ナデ	外面：黒褐色 内面：暗褐色	3区下部貝層	広畑技法
図4-4	写真2-4	平縁、 肥厚	地文である横位条線の上から2条の斜状沈線	口縁部上半： 横ケズリ 口縁部下半： 横ナデ	外面：黒褐色 内面：黄褐色	貝層下	広畑技法
図4-5.6.7	写真2-5.6.7	平縁、 肥厚	口縁部に棒状工具による連続刺突、口縁部直下の横位沈線から平行沈線文が施文、横位条線	横ナデ	明褐色	2区貝層中	内野技法

表2 掲載土器観察表(2)

図版	写真	口縁部 形態	外面所見	内面調整	色調	出土層位	備考
図5-1	写真3-1	波状	頂部下部に縦に瘤が2つ充填。 上はブタ鼻状で下は円形。	ケズリ	外面：明黄褐 内面：明黄褐	不明	
図5-2	写真3-2	平縁	帯縄文系、口縁部に貼付。 頸部は微隆帯にブタ鼻状の貼付。		外面：黄褐 内面：黄褐	5区表土中	
図5-3	写真3-3	波状	頂部下部に楕円形の瘤を縦に貼付。 その下部にブタ鼻状の貼付。	ナデ	外面：黄褐 内面：黄褐	6区混貝層	
図5-4	写真3-4	平縁	帯縄文系、口縁部に瘤状の貼付。 その下部に2条の帯状の微隆帯に各々ブタ鼻状の貼付。	横ケズリ	外面：明黄褐 内面：明黄褐	不明	
図5-5	写真3-5	平縁	帯縄文系。口縁部に楕円形状の貼付。 頸部は入組文が横位展開すると考えられる。	ナデ	外面：黒褐 内面：黒褐	2区貝層下	
図5-6	写真3-6	平縁	帯縄文系、口縁部は帯状文とその下部にナデ。 頸部には抉りの深い入組三叉文。	口縁部は横位のナデでそれ以下はナナメ削り	外面：黒褐 内面：黒褐	不明	
図5-7	写真3-7	平縁	口縁部は帯縄文。 頸部は弧状に沈線が横位に展開。 沈線の間には磨消縄文が施文。	口縁部は横位のケズリでそれ以下は横位のミガキ	外面：明黄褐 内面：明黄褐	不明	
図5-8	写真3-8	波状	口縁部には入組文。 頸部は入組三叉文が施文。 胴部と頸部の間に突起状の瘤が横位に貼付。 胴部は2条一対の弧線文が横位に展開。	横位のミガキ	外面：黒褐 内面：黒褐	貝層中	



表3 掲載土器観察表(3)

図版	写真	口縁部 形態	外面所見	内面調整	色調	出土層位	備考
図6-1	写真4-1	波状	口縁部に魚眼状三叉文と三叉文が棒状工具によるナナメ沈線を挟んで充填される。胴部はZ字状の沈線の起点と間に三叉文が施文され、胴部下は弧線文が横位に展開。	横位のナデ	外面：黄褐色 内面：黒褐色	5区混貝土層	
図6-2	写真4-2	波状	口縁部に沿う隆帯により三角形区画をなす。頸部は帯縄文により区画されその中に沈線による楕円形区画。各楕円形区画の間の、帯縄文上にブタ鼻状貼付。胴部には弧線文が横位に展開しその間に3個の刻みを入れた瘤を貼付。	横位ケズリ	外面：黒褐色 内面：黒褐色	5区貝層中	
図6-3	写真4-3	平縁	口縁部は横位のナデ。底部に入組三叉文が縦に充填。	横位ミガキ	外面：明褐色 内面：黒褐色	6区混貝層 2区下部貝層	
図6-4	写真4-4	平縁？	口縁部下部に2条切込を入れた楕円形の貼付。その両側から三叉文と考えられる2又状の沈線が充填。	横位ナデ	外面：褐色 内面：黒褐色	5区貝層中	
図7		平縁、 肥厚	口縁部と頸部に紐線文、紐線上は工具による連続刺突、紐線は沈線により区画、弧線文、口縁部・胴部：斜状条線、	横ナデ	黄褐色		
図8-1		平縁	胴部には口縁部の帯縄文と刻目文による区画帯の中に「の」字状の入組三叉文が横位に展開。口縁部の一部に2個の突起が付され、その下部のみV字状沈線と○状沈線から三角形の挟りを加えた文様が充填。	横位ナデ	外面：明黄褐色 内面：黒褐色		
図8-2		平縁	口縁部には5条の刻みを入れた突起を3個付す。胴部は帯縄文区画で、その中に深い挟りによる「の」字状三叉文が横位に展開。	横位ナデ	外面：明黄褐色 内面：黒褐色		
図9		平縁	口縁部～胴部にかけて微隆帯をS字状や○状に貼り付けた文様を横位に展開。胴部～底部は縄文のみ施文される。	横位ケズリ	外面：明黄褐色 内面：黄褐色		

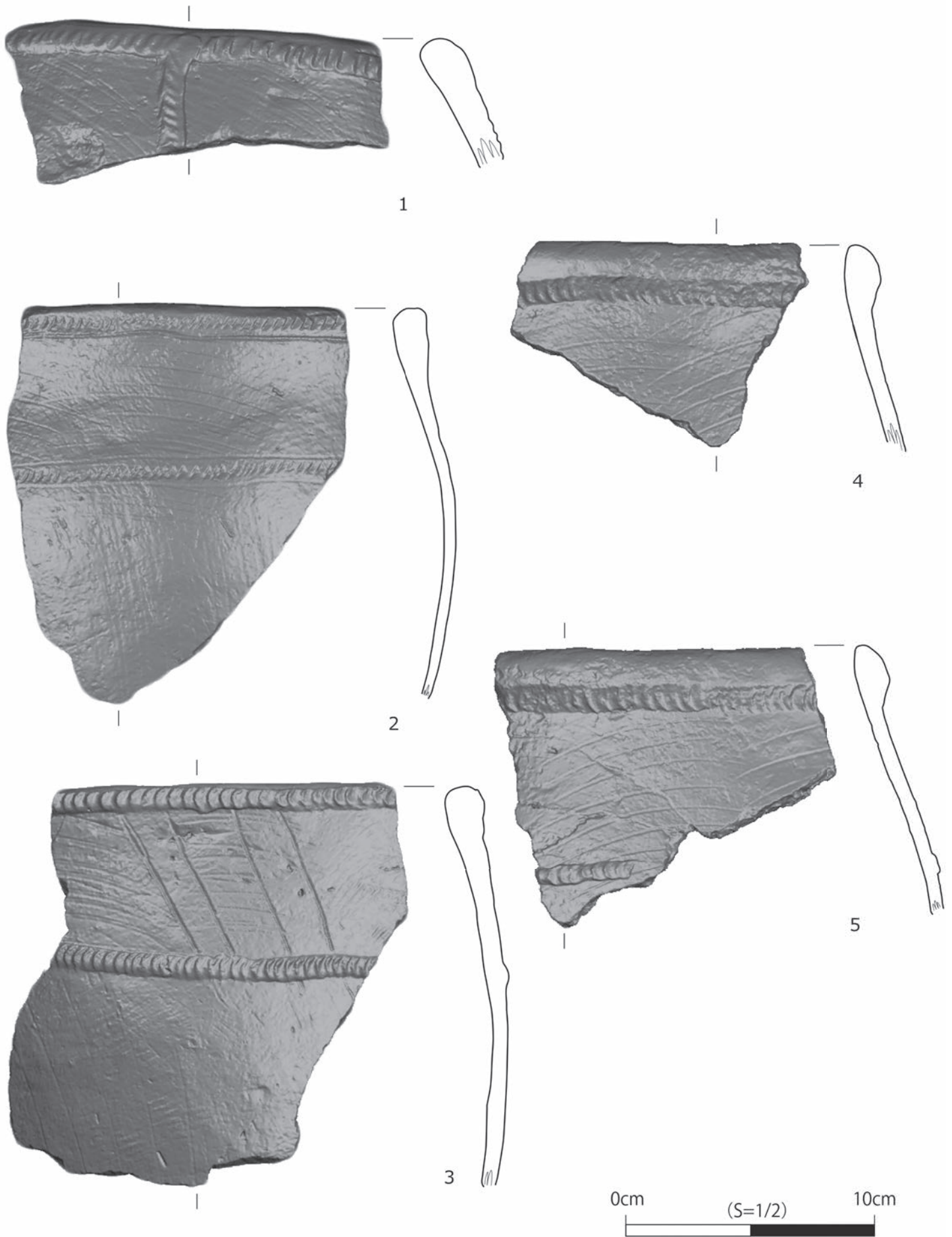


図3 奈土貝塚出土粗製土器 (1)



1



4



2



5



3

写真1 奈土貝塚出土粗製土器 (1)

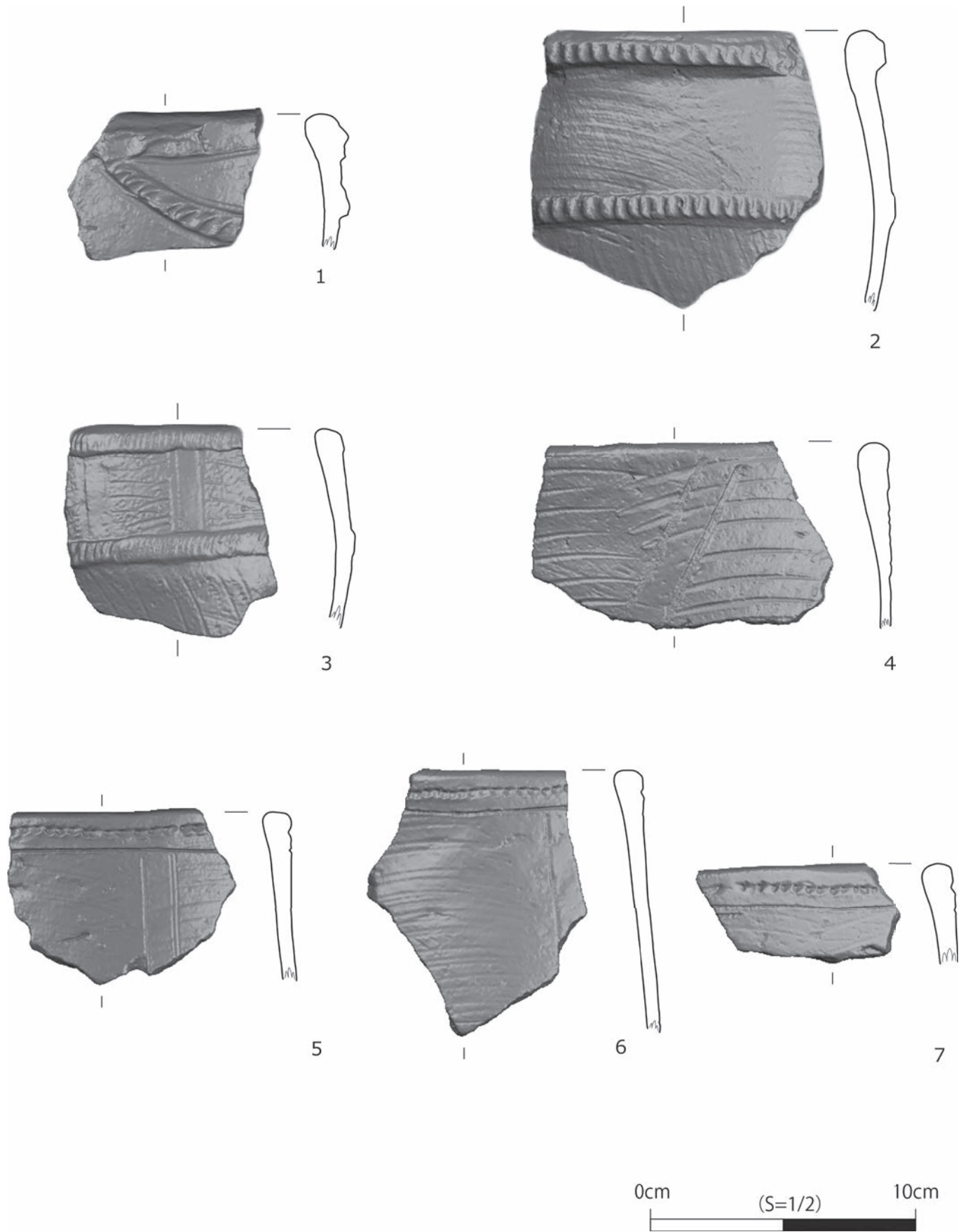


図4 奈土貝塚出土粗製土器 (2)



1



2



3



4



5



6



7

写真2 奈土貝塚出土粗製土器 (2)

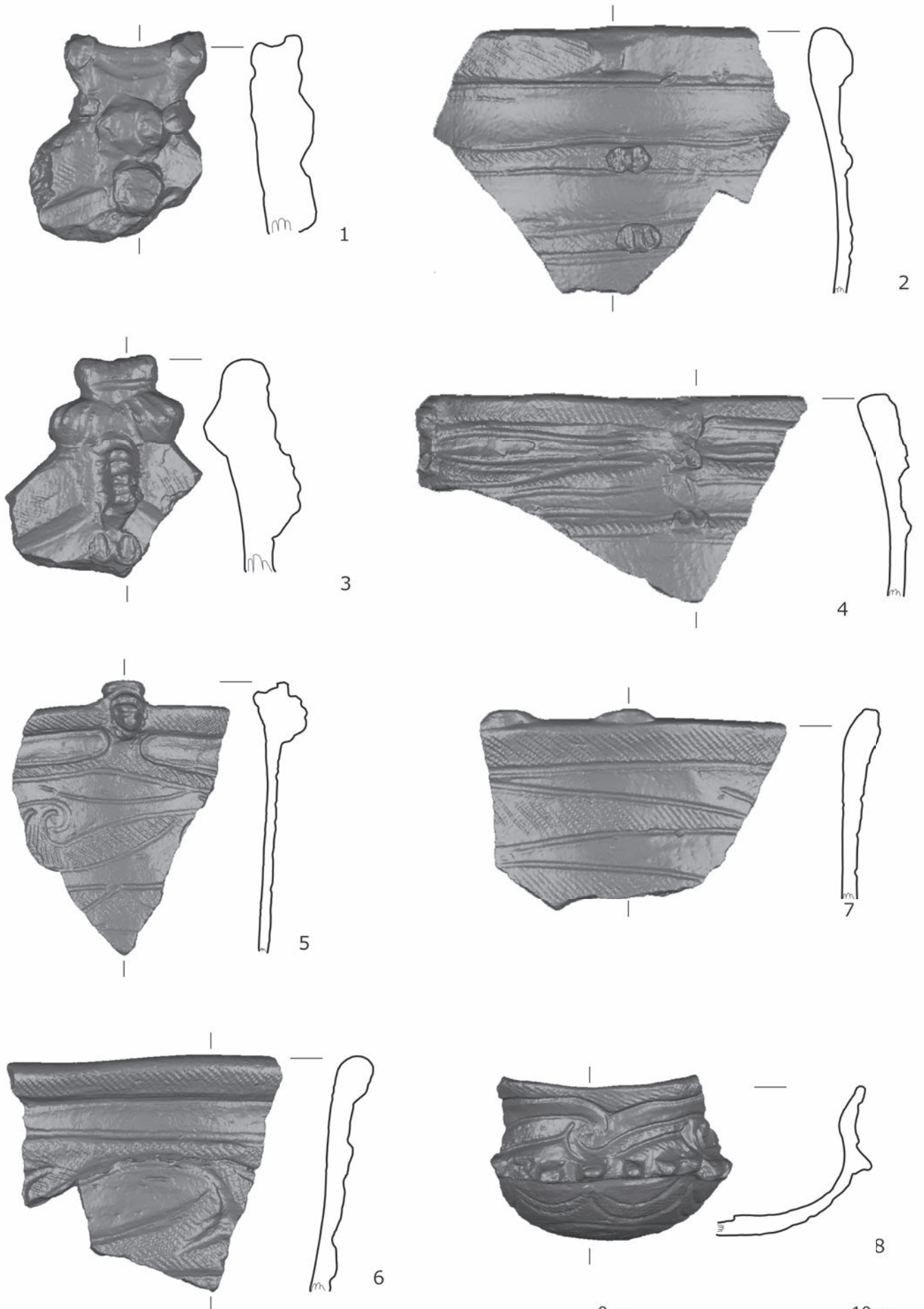


图5 奈土貝塚出土精製土器 (1)



1



2



3



4



5



7



6



8

写真3 奈土貝塚出土精製土器 (1)

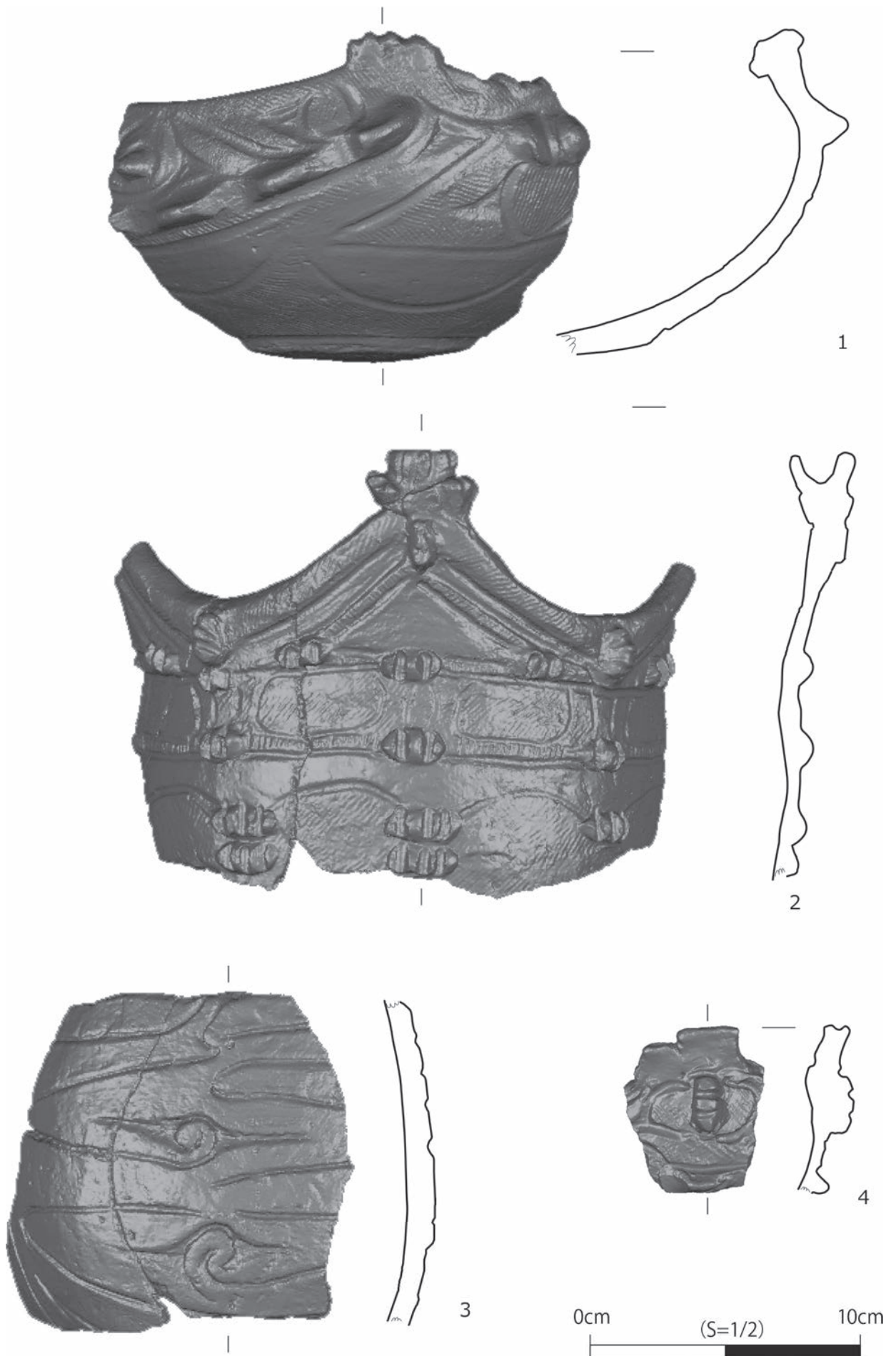


図6 奈土貝塚出土精製土器 (2)





1



2



3



4

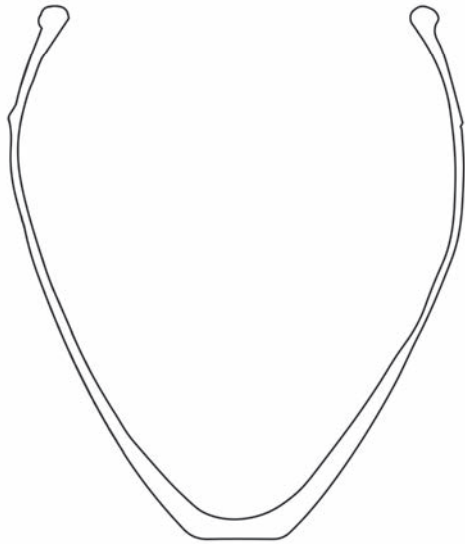
写真4 奈土貝塚出土精製土器 (2)



正面



左側面



右側面



裏面



图7 奈土貝塚出土完形土器 (1)



図8 奈土貝塚出土完形土器 (2)

0cm (S=1/2) 10cm



图9 奈土貝塚出土完形土器 (3)

## 註

- (1) その他土製品や骨角器など多種多様の遺物が出土しているが今回は後・晩期の土器への言及を目的としたため、安行式土器を対象とした。
- (2) 大塚は安行3a式における深鉢の体部文様の分析から横位展開の入組文を関東的、上下起点終点型入組文を東北的な要素とした(大塚1995)。

## 参考文献

- 石橋宏克 1995「奈土貝塚」『大栄町史 史料編I 原始古代』262-272頁 大栄町
- 石橋宏克 2000「奈土貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文時代)』944-947頁 千葉県
- 石橋宏克・黒沢哲郎 1998「奈土貝塚」『千葉県香取郡大栄町内遺跡発掘調査報告書 平成9年度 奈土貝塚遺跡・久井崎II遺跡』大栄町教育委員会
- 大塚達郎 1995「安行3a式土器型式構造論基礎考」『縄文時代』6号 91-113頁 縄文時代文化研究会
- 大塚達郎 2001「曾谷式土器再考の視点」『土曜考古』25号 67-94頁 土曜考古学研究会
- 金子裕之 1972「安行系紐線文土器における二者」『信濃』24巻7号 64-70頁 信濃史学会
- 菅谷通保 2004「曾谷式における三つの精製深鉢形土器」『土曜考古』28号 23-36頁 土曜考古学研究会
- 鈴木加津子 1991「前浦式研究の一視点」『利根川』12号39-43頁 利根川同人
- 鈴木公雄 1969「安行系粗製土器における文様施文の順位と工程数」『信濃』21巻4号 1-16頁 信濃史学会
- 大栄町教育委員会 1985『千葉県香取郡大栄町遺跡分布調査報告書』大栄町教育委員会
- 鷹野光行 1978「前浦式土器の研究」『考古学雑誌』64巻 第3号 199-220頁 日本考古学会
- 西村正衛 1984『石器時代における利根川下流域の研究：貝塚を中心として』早稲田大学出版部
- 古谷 渉 2004「安行式粗製土器編年試論Ⅱ—紐線文系及び条線文系土器群における口縁部製作技法の成立と展開—」『縄文時代』15号 165-192頁 縄文時代文化研究会
- 矢野文明 1993「安行式紐線紋土器の口縁部技法について—特に「中妻技法」を中心として—」『埼玉考古』30号 83-92頁 埼玉考古学会
- 山内清男ほか編 1964『日本原始美術1 縄文式土器』講談社
- 早稲田大学高等学院歴史研究部 1958『千葉県香取郡奈土貝塚発掘報告書』早稲田大学高等学院歴史研究部

## 図表出典

- 図1、2 国土地理院の地理院地図と電子地形図を基にイラストレーターを用いて筆者作成
- 図3～6、8、9 CREAFORM社製3Dスキャナー「Exascan」、3D Systems社製編集ソフト「Geomagic Control」を用いて筆者作成、使用写真は會津八一記念博物館2014年度特別展図録の元データを掲載
- 写真1～4、図7 筆者撮影
- 表1～3 筆者作成